夢の舞台を、次の誰かへ

川西市立緑台中学校3年1組　南（みなみ）　櫻子（さくらこ）

三歳の夏、私は初めて能楽の舞台を見た。独特のお囃子の響き、能面をつけた演者の美しい所作。その一つ一つに幼いながらも心を奪われ、「どうしてもこれを習いたい！」と両親に頼んだ。しかし、能楽を習うには装束や道具などにも費用がかかる。「うちの家計では少し難しい」と言われ諦めるしかなかった。悔しかったが、能楽への憧れは変わらなかった。そんな私の運命を変えたのが小学生の時に見つけた観世流の「能楽子ども教室」だった。そこでは、負担の少ない参加費で能楽師の先生から指導を受け舞台に立つ機会まで与えられる。私は迷わず参加した。当時の私はただ「運が良かった」と思っていた。しかし、中学生になり社会の仕組みや税金について学ぶなかで、私はあの教室を思い出した。その教室が文化振興のための公的な支援を受けていると知ったからだ。私が何気なく参加していた教室の背景に社会全体の支えがあったこと。その支えの一つに、私たちが納める税金があると気付いた。三歳の私はお金が理由で諦めた。けれど数年後、社会の支えによっている。そして、実際に学んだからこそ、この能楽を学ぶことができた。もしあの教室がなかったら私は素晴らしい文化を知り、自分の世界を広げることはなかったかもしれない。

税金というと、道路や病院、警察など暮らしを支えるものを思い浮かべる。私も以前は、そのような生活に必要なものを支えるための税金だと思っていた。しかし私にとって税金はそれだけではない。家庭の経済状況に左右されず子どもたちが文化に触れ、「やってみたい」という夢に挑戦する機会をつくるものでもあるのだ。私が能楽教室で得たものは技術だけではない。舞台に立ったときの緊張感や、やり遂げた経験。難しい稽古も乗り越えた自信。それらは今、受験勉強で苦しいときや模試で緊張したときにも私を支えてくれている。あの教室で私は、伝統文化に触れ、努力する大切さや緊張に負けず挑戦する強さを身につけた。幼い頃に憧れた能楽は今では私を支える大切なものになっている。そして、実際に学んだからこそ、この文化を残す大切さも感じるようになった。

だから私は、将来、日本を支える大人になったとき、税金を「仕方なく払うもの」ではなく感謝と誇りを持って納めたい。そして、お金を理由に夢を諦めかけている子どもたちにも、「やってみたい」ことに挑戦できる環境であってほしい。一度は諦めた能楽を学べたのは私一人の力ではない。教室を支えてくれた人たちがいたから、私は舞台に立てた。今度は、私が受け取ったものを、次の誰かへつなげていきたい。税金は私たちの「今」を支えるだけのお金ではない。誰かの「やってみたい」を「やってみよう」に変え、新しいことに挑戦するきっかけをつくる。そしてその挑戦が日本の伝統文化を次の世代につなぐことにもなる。私にとって税金とは、未来の誰かの夢を支える「未来への投資」なのだ。